

重点1 毎日の授業の充実 / 5B 体験活動（自然教室の実施状況）

ねらい

自然教室は、野外活動を通して自然にふれる楽しさを味わうとともに、集団生活を通して人間的なふれあいを深め、相互の理解と信頼を高めることを目的としています。

この事業は、公害対策の一環としてスタートした「みどりの学校」を母体として、昭和47年度に小学校6校の6年生587名が参加して行われました。昭和61年度からは、文部省自然教室推進事業を含めた現行の事業が始まり、以後、基本的には、市内小・中学校各1学年を対象に現在の形で実施してきました。平成10年度からはすべての小・中学校が市の単独事業となり、本年度で10年目になります。

現状

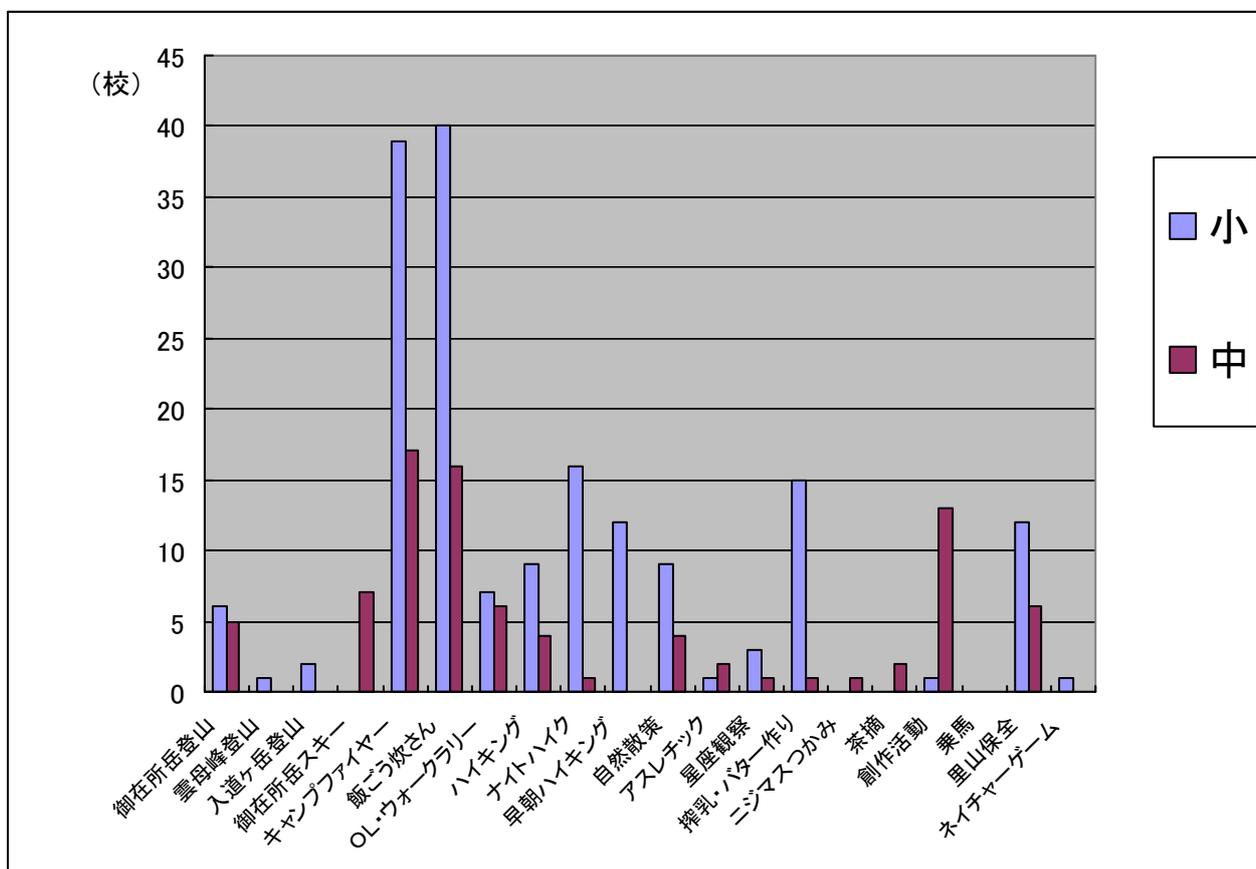
○ 平成19年度の実施状況

＜施設利用状況＞

利用施設名	小学校	中学校
四日市市少年自然の家	40校 2974名 (6/21～11/30)	18校 3775名 (4/24～2/27)
鈴鹿青少年センター		4校 1738名 (5/22～6/22)
国立乗鞍青年の家		1校 344名 (2/4～2/6)

※1, 2年生実施校: 1校

＜主な活動状況（実施校数）＞



○ 平成19年度の取組の現状から

(1) 活動事例

- ・ 小学校では、6月から11月にかけて行われ、5組10校が同日開催でした。同日開催の学校は、同じ内容で行事を行うこともあり、違う学校の子どもたちとの交流を楽しみました。特に同じ中学校区同士の組み合わせは、中学生へ向けてのよい交流の機会となっています。
- ・ 中学校では、生徒数(収容能力)の関係等で、4校が鈴鹿青少年センター、1校が国立乗鞍青年の家を利用しました。
- ・ 中学校では、集団づくり、仲間づくりに重点がおかれることから、実施学年を2年生から1年生に移行する学校が多くなっています。(1年生実施校15校・2年生実施校6校・1, 2年生実施校1校)
- ・ 小学校では、登山、ハイキング、星座観察、里山保全等、中学校では、オリエンテーリング、ハイキング、里山保全、ネイチャーゲーム等の自然と親しむ活動が多く盛り込まれています。
- ・ 小・中学校とも、ほとんどの学校が飯ごう炊さんやキャンプファイヤー等、仲間と協力して一つのものをつくり上げる活動を取り入れています。

(2) 主な成果

- ・ 小・中学校とも、「自然とのふれあいを通して、日常の学校生活では得られない体験学習をすることができた」「集団生活の中で、みんなで協力すること、マナーやルールを守ることの大切さを学んだ」等の多くの学習の成果がありました。
- ・ 小学校では、「星座観察、里山保全等の活動を通して、自然への関心や知識を高めたり、自然環境を守ることの大切さを学ぶことができた」等、中学校では、「実行委員会を中心とした活動により、自主的な実践力がついた。また、集団のルールを身につけるとともに、規律を重んじ周りの仲間たちと協力して行動できた」等発達段階に応じた成果がありました。
- ・ 中学校では8校(四日市市少年自然の家:7校、国立乗鞍青年の家:1校)が冬季にスキーを中心とした活動を行いました。御在所スキー場でのスキー実習では、昨年度に引き続き、三重県スキー連盟の協力を得て、充実した活動が行われました。インストラクターの方々の専門的な指導により、スキー初体験の生徒も滑ることができるようになり、スキーを楽しむとともに、自然の美しさを体感することができました。

課題(今後の方向)

- 自然教室は、児童生徒にとって自然体験をする場として、集団活動で社会性を身につける場として、大変有意義な活動の場となっています。自然とのふれあいを通して学んだことや集団生活を通して学んだことなどを学校生活、教科学習、道徳、総合的な学習の時間(環境学習等)に関連付けて発展・定着させていくことが大切です。
- 自然教室のあるべき姿や、四日市市の自然教室でどのような活動をして、どのような力を子どもにつけさせたいのかを明らかにすることが必要になっています。
- 自然に働きかける野外での活動が増えた反面、雨天時における計画や準備が必要となってきています。雨天時の活動はレクリエーションや創作活動であると決めてしまわずに、雨天時でもできる自然体験活動を考えていかなければなりません。また、冬季実施においては、御在所スキー場でのスキー実習だけでなく、御在所ロープウェイでの自然観察、散策等の体験活動を考えていく必要があります。
- 中学校区での活動内容を考えるにあたり、小学校時代にできなかったものを発達段階に応じて体験できるようにしていく必要があります。そのために、自然教室の指導・企画・実施の面において小中の交流・連携が大切になっています。